

# 論壇

## 少子高齢化危機感持てず

経営学の人たちがよく使う話に「ゆでガエル」というものがある。水を張ったお鍋に蛙を入れて少しずつ温めていくと、蛙はゆで上がって死んでしまう。しかし、最初から沸騰したお鍋に蛙を入れると、蛙は慌てて飛び出すので命に別条はない。この話はもちろん本当のことではない。ただ、危機に対する人々の対応の姿を説明するために使われる話である。

企業の経営では、社会の大きな変化に企業がなかなか対応しないことがよく問題になる。対応が遅

伊藤 元重 (国際経済学) 学習院大教授

ればいずれは企業の危機につながるのに、どれだけ多くの企業が適切に対応しているのか。「ゆでガエル」になって最後は破綻する企業も多い。

企業だけではない。社会も同じだ。日本社会は少しずつ少子高齢化が進んでいる。高齢者の割合が

## 「ゆでガエル」になる前に

増え続け、人口は減少していく。これを「静かなる危機」ということもある。日本にとって危機なのだが、あまりにもゆっくりと進行しているので、誰も切迫した危機感を持ってないのだ。この状態で社会の変革をしなければ、大変なことになる。財政は危機的状態になるだろう

うし、医療も介護も崩壊状態になるかもしれない。このままでは日本がゆでガエルになってしまう。コロナ禍は、そうした日本に熱湯をかけるような効果がありそう

だ。コロナ禍は大変な出来事ではあったが、それによって人々が社会の変化に敏感になっている。あ

る大手鉄道会社の社長が言っている。「人口減少で鉄道利用者が減っていくことは分かっていた。ただ、それは10年以上かけてのゆっくりとした動きであると考えていた。ところがコロナ禍で、わずか1カ月で乗客が激減してしまった。乗客が減るということを実感

した。おかげで10年先ではなく、今から少子高齢化への対応を急ぐことの重要性を再認識した。ゆでガエルにならないようにしなくては」という発言だ。

## コロナ下の動き有効利用

少子高齢化は社会を大きく変えるだろう。何も対応しなければ大変なことになる。誰もがそうしたことに気がついていないはずだ。医療や介護はもちろんだが、財政がうまく回らなくなれば、教育や社会資本維持など、あらゆる社会機能が劣化してしまう。そうした事態にならないようにするために

は、今からさまざまな改革を進めていかなければいけない。コロナ禍の中で私たちがいや応なしに検討したり、実行に移したりしたことがある。在宅勤務やオンライン会議の活用、遠隔授業や遠隔診療などは多くの人が体験した。ワクチンの重要性を再認識し、日本の医薬品の開発力の貧弱さが明らかになった。感染の急増で病床が足りなくなると、医療崩壊の恐ろしさを多くの国民が感じた。諸外国に比べて検査件数が圧倒的に少ないことが露呈した。

こうした動きは新型コロナウイルスの感染という緊急事態に伴う動きではあるが、日本の高齢化への対応を進めるためにも、こうした動きを利用することが有効である。コロナ禍で起きている社会の大きな変化の重要性を認識する必要があるのだ。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。